

日置流系図

国枝史郎

青空文庫

「チエツ」と忠蔵は舌打ちをしたが、「由さんお前みこしお輿こしを上げなよ」

「へ、どうぞあなたから」——由蔵はこう云うと舌を出したが、にわかにブルツと身みぶる顫ふるいをした。さも恐ろしいというように。

「松公、お前立つ気はないか？」

「どうぞお年役にお前さんから……私はどうも戸を開けるのが昔から不得手でございましてね」

「つまらない事云わねえものだ。戸を開けるに得手も不得手もねえ。みんな厭なら仕方がねえ」忠蔵はひよいと立ち上がったがどこか腰の辺きが定きまらない。土間へ下りると下駄を突っかけそこから仕事場を振り返り、

「おい確しっかり見張つていねえ」

こう云つたのは忠蔵自身がやはり恐い証拠しやうこでもある。それでも足音を忍ばせてそつと表戸へ近寄ると潜戸くぐりかんぬきの門かどへ両手を掛けた。

とたんにトントンと叩かれたのでハツと一足退いたが、連れて門がガチリと外れ、その音にまたギョツとしながら忠蔵は店へ飛び上がった。と、潜戸がスーと開いて、まず痩せこけた蒼白い手が指先ばかりチラリと見え、それから古ぼけた帷かたびら子姿を半身ぼんやりと

浮かばせるとツト片足がかまちを跨ぎ続いて後の半身がヨロヨロと土間へはいって来た。

顔は胸までうつむ俯向いている。雪のように白い頭髪を二房たらしと額際ひたいぎわから垂らし、

どうやら髻も千切れているらしく鬘まげはガツクリと小鬘へ逸れ歩くにつれて顫えるのである。みたけすぐ身長勝れて高くはあるが枯木のように水気がなく動いたびに骨が鳴りそうである。左の肩

をトンと落とし腕はだらりと脇に下げ心持ちそび簪やかした右の肩を苦しそうな呼吸いきの出し入れによつて小刻みに波のように動かすのである。所々剥はげたつぎや蟬鞘の大小を見栄もなくグツタリと落とし差しにして、長く曳いた裾かかとで踵を隠し泳ぐようにスースーと歩いて来る。

ほとんどどこにも生氣がない。老武士おいふしその人にならばかりでなくその老武士がはいって来ると共にあらく総る物が生氣を失い陰々たる鬼気に襲われるのであった。店に飾つてある弓や矢とちや点されてある行燈あんどんまでぼつと光を失つてしまう。

老武士は顔を埋うづめたまま店先までスーと寄つて来たが余韻のないしわが嘎れた低い声で、

「弓弦を一筋……」と咽むせぶように云つた。

「へーい」

と忠蔵は応じたが何がなしに総身ゾツとして、木箱はこを探る手が顫えたのである。それでも弓弦を差し出すと、また同じ声同じ調子で、

「小中黒の征矢三筋……」

「……………」今度は忠蔵は言葉もなく云われた矢を取って差し出した。と老武士は小手を振ったがこれは鳥目を投げたので、投げたその手で二品を掴むとクルリと老武士は方向を変え、そのスースーと泳ぐような足で開いたままの潜戸から煙りのように闇夜の戸外へ消えて行つた。

その翌日のことである――

「ほんとかな？ それは？ その噂は？ ふうむ、不思議な老人じやの……」

「あつら 誂えた弓をわざわざ見に来た旗本の次男恩地主馬は声はずませてこう訊いた。

「ほんとも本当、昨夜で十日、きまつて参るのでござりましてな……」

こう云つて忠蔵は居住いを正し、真つ昼間ながら四辺を見廻し、

「それで家中もうすっかり怖気を揮つておりますので」

「で何かな、その老人は、どこから来るのか解らぬのかな？」

「へい、それがあなた解るくらいなら……」

「そうさな、恐ろしくもないわけだな……でそれでは今日まで後を尾行した事もないのだな

「？」

「そんな事、かりにも出来ませうなら家内一同夜になるとああまでしよげ返りは致しませぬので……」

本所の七不思議

主馬はちよつと頷うなずいてそれから小声で笑ったが、

「忠蔵、安心するがよいわ。それがし今夜朋輩と参つて曲者の正体見現わしてくりように」「どうぞお願い致します」忠蔵は喜んで頭を下げた。

「弓の方は期日までに頼んだぞ」

「それはもう承知でございます」

「化物沙汰ばけものに心を奪われ商売おろその方を疎かにしては商人あきゆうど冥利に尽きるといふものだ――

――それでは今夜参ると致そう」

「よろしくお願い致します」

主馬はそのまま立ち去つて行つたがはたして夜になると、朋輩二人を連れ、弓師左衛門

の家へやつて来た。

左衛門夫婦も挨拶に出て雑談に時を費したがいつもの時刻に近付くと忽々夫婦は引き退り後には主馬と朋輩の武士と忠蔵達が五、六人店を通して土間の見える職人部屋に残っていた。

夜はしんと更けて来た。何となく物凄く思われるかして主馬を初め集まっている者は、次第に言葉数が少くなつた。とその時表戸をトントントンと叩く音がする。ハツと皆は眼を見合わせむつと一時に呼吸を呑んだ。

それでもさすがは武士だけに主馬は躊躇もせず立ち上がり、がちりと門を取り外した。まず細い手があらわれる。それから半身が浮き出して来る。泳ぐような歩き方ではない。泳ぐと、その老武士は云うのであつた。

「弓弦を一筋……」と消えるような声で、

「へーい」

と忠蔵は顫えながら云つた。

「小中黒の征矢三筋……」

「へーい」

と忠蔵はまた応じた。

くるりと老武士は方向むきを変えようと吸われるように潜戸くぐりの隙から戸外そとの夜の闇にまぎれ込んだ。

「方々」と主馬は声をかけた。どうやらその声には生気がない。それでも自身真つ先に立つて同じ潜戸から戸外へ出た。首うな垂れた老武士は星月夜の道をスースーと三間ばかりかなた彼方を歩いている。主馬と朋輩と三人の武士は穿いている雪駄せつたの音さえ忍ばせ着かず離れず慕い寄った。

ものの半町も行つた頃、その老武士は右へ曲がった。で三人も右へ曲がった。右へ曲がってまた半町老武士はスースーと歩いたが、そこでピタリと足を止めた。と門の開く音がして左側の家並の一所からふと人声が聞こえたかと思うと老武士の姿は見えなくなった。

「……………」

三人は黙つて顔見合わせた。それから静かに足を運び老武士の姿の消えた辺まで用心しながら近付いた。

道場構えの一字の屋敷がそこに広々と立っている。森然しんと四辺あたりは物寂しくもちろん燈ともし火びの影さえもない。三人はしばらくたらずイন্দまま余りの不思議さに言葉も出ない。彼ら三

人は三人ながらこの辺の地理には慣れている。そしてほとんど毎日のようにこの往来も通っているのである。それにもかかわらずこんな所にこんな立派な道場屋敷の建っているということを一度もこれまで見たことがない。

「どうも不思議だ」とまず主馬が朋輩の一人へ話しかけた。「たしかここには柏屋という染め物店があつた筈なのに……」

「さようさ、全く不思議だの」話しかけられた主馬の朋友の南条紋太郎が領うなずきながら、「しかも拙者は今日昼頃たしかにこの前を通つた筈じゃ。そしてその時はその柏屋がちやんと店を開いていたのじゃ。いかに大江戸は素早いと云つてももの一日と経たないうちに格子造りの染め物店が黒門いしか厳めしい武家屋敷となるとはちとどうも受け取れぬ話じゃわい」

「さては狐狸にでもつままれたかの」——もう一人の朋輩荒木内記は呻くような声でこう云つた。

「全体どうも本所という土地がばけもの化物には縁の近い土地での。それ本所の七不思議と云つて狸囃しにおいてけ堀片葉あしの芦あしに天井の毛脛、ええとそれから足洗い屋敷か……どうもここにこの屋敷もそのうちの一つではあるまいかの？」

「馬鹿を云わつしやい、臆病千万」

と主馬は一口に打ち消したが、その実やはり心のうちではそいつを考えていたのであった。

「主馬殿、ともかくも帰った方が泰平無事ではござらぬかの」——紋太郎は小声で誘つて見た。

「君子危あやうきに近寄らずじや」

「とは云えこのまま帰つては弓師左衛門や忠蔵へ対してちと面目がござらぬではないか」主馬は煮にえ切らずこんな事を云つた。それから門へ近寄つて何気なくトンと押して見た。すると門はゆらゆらと揺れギーという寂しい音を立てて内側へ自然と開いたのであった。

静寂を破る弦音

「や、門が開きましたな」

「これはこれは不用心至極」

三人の者は事の意外に胆きもを潰つぶしてこつう眩がやいた。

「門が開いたを幸いに案内を乞い内へはいり様子を見ようではござらぬか」

主馬はこう云つて二人を見た。

「よかろう。案内を乞うことにしよう」こう紋太郎はすぐ応じた。内記は少からず躊躇したがそれでもやがて決心して二人の朋輩の後を追つた。

三人は玄関の前まで来た。

「頼む」と主馬が声を掛けたが誰も返辞をする者が無い。家内は森然と静かである。

「深夜まことに恐縮ながら是非にご面会致したければどなたかご案内くだされい」

再び主馬は声を掛けたがやはり家内からは返辞がない。人のいない空屋のようで陰々として物凄い。三人はにわかには気味悪くなつた。

とたんに、ヒエーツと絹を裂くような鋭い掛け声が奥の方から沈黙を破つて聞こえたかと思うと、シューツ空を切る矢音がして、すぐ小手返る弦の音がピシツと心地よく響き渡つた。「あツ」と三人はそれを聞くとほとんど同時に叫びを上げたが、それは驚くのが理である。掛け声、矢走り、弦返り、それが寸分の隙さえなく日置流射法の神髓にピタリと揃まつているからである。

主馬が真つ先に逃げ出したのはよくよく驚いたのに相違ない。三人往来へ走り出るとホ

ツと額の汗を拭った。

「我ら日置流の射法を学びここに十年を経申すがこれほど凄じい弓勢にはかつて逢ったことございませぬ」

「全く恐ろしい呼吸でござったのう」

「妖怪でござるよ。妖怪でござるよ」

三人が口々にこう云つたのは不思議な屋敷の門前から五町あまりも逃げのびた時で、三人の胸は早鐘のように尚この時も脈みやくう打っていた。

翌日三人は打ち揃つて改めてその屋敷まで行つて見たが、そこにはそんな屋敷はなくて柏屋という染め物店が格子造りに紺の暖簾のれんを風にたなびかしているばかりであつた。

この弓屋敷の不思議の噂は間もなく江戸中に拡がった。本所七不思議はさらに一つ「弓屋敷の矢声」の怪を加えて本所八不思議と云われるようになった。弓道自慢の幾人かの武士は自分こそ妖怪の本性をあばいて名を当世に揚げようと屋敷の玄関までやつては来たが、大概一矢で追い返されよほど剛胆な人間でも二筋の矢の放されるを聞いては、その掛け声その矢走りの世にも鋭く凄いのおそけに怖気を揮つて逃げ帰った。

「ごめん」

とある日一人の男が柏屋の店を訪ずれた。年の頃は二十五、六、田舎者まる出しの仁^{じんて}態^{たい}で言葉には信州の訛^{なま}りがあつた。

「へい、染め物でございますかね」

柏屋の手代はこう云いながら、季節は七月の夏だというに盲目^{めくらじま}縞^{あわせ}の袷^{あわせ}を一着なし、風呂敷包みを引つ抱えた、陽焼けた皮膚に髭だらけの顔、ノツソリとした山男のようなそのお客様を見守つた。

「いんね、そうじやござえません。噂で聞けばお前^{めえ}さんの所へ化物が出るといふこと。ひとつ俺^{おい}らがその化物を退治してやろうと思ひましてね」

「ああさようでございますか。それはどうも大変ご親切に」手代はおかしさを堪^{こら}えながら、「失礼ながらご身分は？」

「信州木曾の獵^{かり}師^{ゆうじ}でござわす」

「え、獵^{かり}師^{ゆうじ}でございますつて？」

「ああ俺^{おい}ら獵師^しだよ。一丁の弓で猪猿熊^{しし}を射て取るのが商売でね。姓名の儀は多右衛門でござわす」

「へいさようでございますか。どうぞしばらくお待ちくださって」

手代は奥へ飛んで行つたが引き違ひに出て来たのは柏屋の主人の弥右衛門という老人であつた。

弥右衛門は多右衛門の様子を見て思う事でもあると見えて丁寧ていねいに奥へ案内した。幽霊の噂が立つて以来實際柏屋染め物店は一時に寂れてしまったので、たといどのような人間であらうと、その化物を見現まわしてくれて、厭いやな噂を消してくれる人なら、喜んで接待しようというのが弥右衛門の今頃このころの心なのであつた。

まず茶菓を出し酒肴を出し色々多右衛門をもてなした。多右衛門は別に辞退もせずさりとて卑いやしく諂へつちいもせず平気で飲みもし食いもしたがやがてゴロリと横になつた。

「やれやれとんだご馳走になつて俺ハアすつかり酔いましただ。どれ晩まで一休み。ごめんなんしよ、ごめんなんしよ」

こういふ端はじから多右衛門はグーグーいびき軒ひびきをかくのであつた。

暑い夏の日もやがて暮れ、涼風すずかぜの吹く夕暮れとなつた。それから間もなく夜となつた。その夜が次第に更けてゆく。

帛を裂く掛け声

こうして子の刻も過ぎた時ようやく多右衛門は起き上がった。

「あ、お目覚めでございますかな」

じつとそれまで多右衛門の側にかしこまっていた弥右衛門はこうこの時声を掛けた。

「ハア、どうやら目がさめ申した。今、何時でござえますな？」

「丑の刻に間近うございませうかな」

「へえもうそんなになりますかな。が、ちょうど時刻はようごわす。どれ用意をしようかな」

多右衛門は持つて来た風呂敷包みを不器用の手付きで拵げたが、中には桑の木で作ったらしい手垢でよごれた半弓と征矢が三本入れてあった。

「どっこいしょ」

と掛け声と一緒に彼はヒョロヒョロと立ち上がった。雨戸を開けて中庭の方へそのままスーと消えてしまったのである。

後は森然と静かであった。弥右衛門はじつと耳を澄まして中庭の様子を聞こうとしたが

何の物音も聞こえない。そのうち次第に眠くなつた。これは毎晩のことである。劇しい睡眠に襲われて家内一同眠っている間にいろいろの事がおこるのであった。

「眠つてはいけない、眠つてはいけない」

こう弥右衛門はつぶやながら傍の火鉢から火箸を抜き取りそれを股へ突き立てた。これで眠気は防ぐことが出来る。

この間も夜は更けて行つた。と鳴り出した鐘の音。回向院で撞く鐘でもあろうか。陰々として物寂しい。

とたんに「ヒエーツ」と帛きぬを裂くような凄じい掛け声が掛かつたかと思うとピューツと空を抜く矢走りの音に続いて聞こえる弦つる返りの響き！ しかしそれより驚いたのは、その次に起こつた笑い声であつた。

「ワツハツハツ」と暢のんき氣そうに馬鹿にしたようにまず響いたが、「そんな事じゃ駄目だ、駄目だ。それじゃ獣は殺されねえ。ワツハツハツ」とまた笑う。それは多右衛門の声である。

その笑い声が途絶えた刹那れっぱくまでも裂帛の掛け声がした。矢走りの音、弦返りの響き。「ワツハツハツハツはまだ駄目駄目！」と、多右衛門の声がまた聞こえた。三度みたび凄まじい掛

け声^しが起こり続いて矢走りと弦返りの音が深夜の沈黙^{しじま}を突裂^{つんざ}いたがやはり多右衛門の笑い声が同じような調子に聞こえて来た。

「ワツハツハツハツ、まだ駄目じや。人間を射ることは出来ようが獣を射ることは出来そうもねえ。お前^{めえ}さんの持ち矢はもう終えたのか。それじゃ今度は俺の番だ……俺の弓には作法はねえ。そうして掛け声も掛けねえのさ。黙って引いて黙って放す。これが^{かりゆうど}猫^{うど}夫^との射方^{いかた}だあね」

こういう声が消えたかと思うと、忽ち何物か空を渡る声がグーングーン、グーンと聞こえて来た。矢が三筋弦^{みすじつる}から放されたのであろう。

その後は何の音もない。と雨戸が外から開かれ多右衛門がそこからはいつて来た。左の手に弓を持ち右の手に巻物を載せニタニタ笑いながら座敷へはいると、遠慮なく高胡坐^{たかあぐら}をかいたのである。

「明晩から幽霊は出ますめえ。よく云い聞かして来ましたからの。いや面白い幽霊でね。俺^{わし}にこんなものくれましただ」

とんと巻物を下へ置いて。その巻物こそ他ならぬ弓道日置流^{へぎりゆう}の系図であった。

そして系図には習慣^{しきたり}として流儀の奥義^{しる}が記されており、それを与えられた武芸者は流

儀の本家元となる。

果然、信州は木曾山中の獵師、姓も氏うじもない多右衛門は爾来じらい江戸に止どまつて弓道師範となつたのであつた。

日置弾正を流祖とした日置流弓道は後世に至つて、露滴派ろてき、道雪派どうせつ、花翁派かおう、雪荷派せつか、本心派ほんしん、道怡派どうたいの六派に別れ、いわゆる日置流六派として武家武術の表芸となり長く人々に学ばれたがこの六派の他に尚八迦流という一流があり武芸を好む町人や浪人達に喜ばれたがこの八迦流の流祖こそすなわち獵師多右衛門なのである。

それにしても、不思議な妖怪沙汰を起こし日置流系図を多右衛門に与え別に一派を立てさせたのはいつたい何者であつたらう？

それについて多右衛門はこんなことを云つた。

「今こそ染め物店にはなつてゐるが戦国時代にはあの辺に大きな館があつたのだ。日置弾正様のお館がな。——で、亡魂が残つておられ、日置流の類たゐ、魔まを嘆かせられ夜な夜な怪異を示されて勇士をお求めになられたのだ。そこへこの俺がぶつかったのさ。で、系図を頂戴し極意を許されたというものよ。每晚弦つると矢を買ひに出た者は弾正様の使めしつかい、僕わがなの

「

青空文庫情報

底本：「怪しの館 短編」国枝史郎伝奇文庫28、講談社

1976（昭和51）年11月12日第1刷発行

入力：阿和泉拓

校正：多羅尾伴内

2004年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日置流系図

国枝史郎

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>